

連載

相対論百年【2】

アインシュタインの平和論

小暮 智一

1. はじめに

今年 2005 年はアルバート・アインシュタイン (1879 - 1955) の物理学上の功績を讃えて「世界物理年」(World Year of Physics = WYP2005)に設定されているが、今年はまだアインシュタイン没後 50 周年にあたり、科学上の業績だけでなく、その思想や人となり思い起こすにも意義ある年であろう。編集部からこの機会にアインシュタインについて何か書けという依頼を受けたが、最近の筆者は相対論などとは馴染みが薄く、せいぜい原子物理でアインシュタイン係数と関わるくらいであるから、物理学的なことは他の人にお任せすることにし、ここではアインシュタインの平和論を中心に彼の宗教的心情、平和問題への取り組みなどにについてまとめてみた。平和論といえどどうしてもわが尊敬するイマヌエル・カントの恒久平和論が思い出されてくるので、少し脱線するが、両者の平和論の比較にも触れてみた。

2. 神、宗教、平和論

詩人であり社会学者であったウィリアム・ヘルマンズは生涯、4 回に亘ってアインシュタインにインタビューしており、その時々アインシュタインの思想と心情を率直な語り方で伝えている[1]。その様子を少したどって見よう。

第 1 回は 1930 年 3 月、アインシュタインのベルリンの自宅で行われた。このときアインシュタインはすでに一般相対論を完成し、ベルリン大学教授として統一理論への思いを深めていた時代である。しかし、アインシュタインの身边にはすでにナチスの不気味な脅威が取り囲んでいた。それはアインシュタイ

ンがユダヤ人であり、積極的な平和主義者だったからである。彼はすでに安全ではなくなっていた。このインタビューの最中にも 2 人の怪しげな男女が玄関前でアインシュタインの様子を窺っていた。そうした中で彼はヒトラーの台頭を懸念しつつ歴史の成り行きを予言している。「ヒトラーは正体を現したのだ」、だから「民主主義原理で成り立つワイマール共和国はもたないだろう。宇宙の摂理に従って (ナチス) ドイツは滅び、後の世代がヒトラーの播いた種を刈り取ることになるだろう。」実際、ヒトラーは 1933 年に政権を取り、ドイツはユダヤ民族の殲滅と世界戦争へとつき進んでいく。アインシュタインはその前年にアメリカに招待され、そのまま亡命となった。

また、ヘルマンズが「相対性理論はどのように実用化されると思いますか？」と質問したのに対し、アインシュタインは「そうだね、地上が狭くなったら物質のエネルギーを月面に向けて、人間を送り出すことに使えるかも知れないな。」「この世が嫌になったら、自分自身を一瞬の閃光のうちに消し去り、この惑星の半分を道ずれにすることもできる。」「いいかね、私の公式は両刃の剣なんだ。使い方によって幸福も災いももたらす。その選択は使う人間次第なんだ。」そこには物質エネルギー公式に基づいて将来を見通し、人類の平和を危惧する声も聞かれる。

第 2 回のインタビューは 1943 年 8 月、プリンストン高等学術研究所研究室で行われた。第 2 次世界大戦の最中である。当然、戦争と平和の問題も話題になった。そのときアインシュタインはきっぱりと「今は平和を語るときじゃない。戦争—独裁制を叩きつぶす

戦争の話をするときだ。」「ヒトラー帝国の暴虐行為を目のあたりにしたものなら、武器を取る以外に道はない。」長く平和主義であったアインシュタインの変わり様と率直な告白に驚いたヘルマンズに、彼は「そうだろう。私はもう無原則な平和主義者じゃない。現実的な平和主義者なんだ。」と答えている。インタビューでは触れてないが、アインシュタインはすでに1939年にルーズベルト大統領に核兵器の可能性を進言し原爆製造への道を開いていたのである。しかし、戦後になってこのときの進言は彼の大きな負担となっている。

このインタビューでも神と宗教について触れている。彼はいう。

「人類は宗教の第3段階に入りつつある。それは宇宙的宗教だ。無数の星々の広大無辺さに対する理解が深まれば、人は自分の行為が賞罰によって動機づけられているといわれるのを侮辱だと思うようになるに違いない。それはすべての驚異を創造された神を人間のレベルまでおとしめる侮辱でもある。」

「神はミステリーだ。しかし解けない謎ではない。自然法則を観察すればただただ畏敬の念を抱くばかりだよ。」「自然の総体は生命だ。生命は人間くさい神を拒絶する。」

アインシュタインは自らを宇宙的宗教者といい、その面からカトリック教会に厳しい批判を述べている。「歴史上、ナチスドイツほど暴力がはびこった時代はない。何よりぞっとするのは、(アウシュビッツの虐殺などについて) 教会が口をつぐんでいることだ。カトリック教会が将来、この沈黙の代償を払うことになるのは火を見るより明らかだ。」

第3回は1948年9月、インタビューは戦後3年目に行われたが、プロテスタント牧師が同席したこともあって、詩人との対話は宗教、神に関するものが多くなる。

アインシュタインは宇宙的宗教の立場をとりながら、生来のユダヤ教の基盤を忘れてい

ない。彼はいう。「自分は宗教的人間で、ユダヤ教—キリスト教倫理なくして世界は存続できないと思っている。もっとも、権威筋の主張を受け入れるのにはひどく慎重だがね。人間の尊厳は教会に所属することによるのではなく、」「とりわけ、創造の法則に対する尊厳によるのだと思う。」

「宗教と科学は調和するものだ。」「両者は互いに依存しており、真理の追究という共通の目標を持っている。」「科学者が神は存在しないというのもやはりおかしい。」しかし、「それは教義を受け入れねばならないという意味ではないよ。ひとり一人に与えられた魂は、宇宙を動かしているスピリットによって動かされているんだ。」

平和問題についてヘルマンズは尋ねた。「あなたは原子物理学者緊急委員会の委員長でしたね?」そうだと答えてからアインシュタインは言った。「メンバーの中にはマンハッタン計画(注1)に携わったものもいた。だが、今では彼らも、この惑星の生命の存続を懸念している。原子力問題は科学というより倫理上のものだ。原子力時代が来ているというのに、人々が頭を切り替えようとしないのが私には歯がゆいのだ。」「アメリカは民主主義国でヒトラーはいない。しかし、将来が心配だ。アメリカ人の前途は多難で、内外のトラブルに見舞われるだろう。」ここで平和論者としてアインシュタインはアメリカの将来を予測し、強い危惧の念を表している。

第4回のインタビューもプリンストンで1954年に行われた(図1)。米ソの冷戦はますます深刻さを増しており、アメリカ国内でも狂気の赤狩りが始まった時代でもあった。アインシュタインやチャップリンまで非米活動委員会(注2)で査問されると言う時代であった。そうした中でもアインシュタインは世界政府に対する希望を失っていない。

「世界政府の基本原則に関するかぎり、ロ

シアの姿勢はひどいものだ。しかし、我々の側も同じなんだ。かつて米、英、ロの3国が軍事力を1つにまとめて担保として、超国家政府の基盤を築くよう提案したことがある。そのあとから小国が加わるというわけだ。」
「原子力時代において自由を保障する最善の方法が世界連邦なのだ」と今でも確信している。」

この話の後、アインシュタインは「原爆は廃止すべき」こと「国家主義が危険なのはアメリカの非米活動委員会の魔女狩的手段である」ことなどを説き、あくまで米ソ協調を基礎にした平和に徹すべきことを強調している。

なお、付言すると、1953年にソ連は水爆の保有を宣言し、1954年、アメリカはビキニ環礁で水爆の爆発実験を行った。日本の第五福竜丸が被爆し、久保山愛吉氏が原爆症で死亡したのはこの時である。世界的に原水爆禁止の運動が起こり、哲学者のバートランド・ラッセルはアインシュタインと諮り、湯川秀樹博士を含む9名の科学者の連名で水爆の恐ろしさを説き、平和への行動を起こすことを訴えた。これがラッセル・アインシュタイン宣言である。アインシュタインが署名したのは彼が1955年に世を去る2ヶ月前であった。彼は最後まで平和主義の人だったのである。



図1 第4回インタビューにおけるヘルマンズとアインシュタイン ([1]より)

3. 世界政府の構想

アインシュタインの平和主義は非常に早い時期から現れている。それはユダヤ人という出生にも関連して恐らく幼少の頃から培われてきたものであろう。1914年に第1次世界戦争が始まったとき、多くのドイツ人科学者が戦争支持の声明を出したのに対し、ベルリン大学教授であった35才のアインシュタインは数人の同僚と共に戦争反対の宣言に署名している。

第2次大戦が1945年に原爆投下という悲劇を伴って終了してから、アインシュタインは平和のために、卓越した科学者としての彼の影響力を行使するのを惜しまなかった。それは原爆製造を進言したという過去の反省もあり、その頃の彼は平和のためには核戦争を防止することが最大の課題であると考えていた。それには国連では不十分であり、超国家的な権威を持つ世界政府を必要と考えていたのである。この考えに基づいて彼は1946年の第2回国連総会宛に公開状を送っている[2]。その内容をまとめてみよう。

アインシュタインは戦後の世界が原子力の管理や経済協力といった基本的な問題で、「なんら見るべき進歩がなされていない。」ことを指摘し、それを打開するには国連を非難するのではなく、「世界各国の国民及びその政府によって、それ（国連）が究極目標に対する1つの過渡的なものに過ぎないと認識されることが絶対必要である」と強調している。その上で「この究極的目標とは、平和を維持するために十分な立法上のかつそれを執行する上での権限をゆだねられた超国家的な権威を樹立する」ことであると述べて世界政府の必要性を結論している。それでは現在の国連を世界政府へと移行させるにはどうしたらよいか。それについてアインシュタインは3つのプロセスを提案した。

第1は国連総会の権限を増大すること。拒

否権を持つ安全保障理事会も総会に従属させること。

第2は国連における代表の選出方法の修正。政府の任命によるという現行の方法では任命された人に対して本当の自由というものをまったく残さないことになる。もしも代表が国民によって直接選出されるならば、国連の道徳的権威はかなり強められる。

第3は総会は常時開かれたままであること。それによって総会は次の2つの主要任務を果たすことができる。第1に超国家的な秩序を樹立する方向に向かっての主導権を握ることができること、第2に現実に平和が脅かされているすべての危険地域（いまで言えばイラク、パレスチナ、スーダンなどなど）において迅速かつ効果的な手を打つことができるということである。

この公開状に対し、ソビエト連邦の4人の科学者から早速反論が出された[2]。アインシュタインの世界政府論は資本主義国の主張を反映しているので誤りであるという論旨である。彼らはいう。

「世界政府、超国家という考えは資本主義的独占が自分自身の国境を狭すぎると見なしているという事実の反映である。」「世界的超国家の提唱者たちは資本主義的独占の世界制覇のための華麗な看板に過ぎない世界政府のために、独立を自発的に放棄することをわれわれに求めている。」「アインシュタイン博士は誤った、かつ危険な道に足を踏み入れてしまっている。」

これに対してアインシュタインも懇切な反論を提示している[2]。そのなかで資本主義と共産主義とを比較し、社会主義にも一定の評価を与えているが「社会主義そのものをあらゆる社会的問題の解決と見なすことはできない」と述べている。それに続いて「あなたがたはこと経済に関する領域では、無政府状態に対するあのように熱烈な反対者でありなが

ら、こと国際政治に関する領域では同様に熱烈な無政府状態、すなわち、無制限の国家主権の擁護者になっている。」と述べ、暗に安全保障理事会などにおける非協調的態度を批判している。

「もしもわれわれが、無制限の国家主義という概念とその現実に固執するというのであれば、それはそれぞれの国が戦争類似の手段で自国の目的を追求するという権利を固有のものとして保留することを意味するに他ならない。」

「私が世界政府を擁護するのは、人間がこれまでにみまわれることになった最も恐るべき危険を除去する方法としては、それ以外に可能な方法は存在しないことを確信するからである。全体的破滅を避けるという目的は、他のいかなる目的に対しても優先するものでなければならない。」

こうしてアインシュタインは核戦争の危険回避が世界にとって最大の課題であるとする意見を表明したのである。

4. アインシュタインとカントの平和論

アインシュタインの平和論を理解するためにも、それに先立つカントの平和論と比較するのは有益であろう。カント(1724-1804)の生きた時代も平安な時代ではなかった。フランス革命、ナポレオン戦争、普仏戦争などが続いていた。晩年になったカントは普仏戦争の終結に伴った平和条約には抜け道が多く、平和の保証にならないことを痛感して「永遠平和のために」[3]を著した。この書は今も多くの示唆を含むので、先ずそれを紹介する。

国家間の永久平和のための条件として彼は予備条項と確定条項を分けているが、予備条項6箇条のうち重要なのは第3条の「常備軍は時とともに全廃されなければならない」と第5条の「いかなる国家も、ほかの国家の体制や統治に、暴力をもって干渉してはならな

い」との2つであろう。常備軍はほかの諸国を絶えず戦争の脅威にさらし、それが刺激になって互いに無制限の軍拡競争を競うようになる。そのため、軍事費は増大し、その重荷を逃れるために常備軍そのものが先制攻撃の原因となるからである。また、第5条はいかなる国にも他国を干渉する権利はないという倫理規定であるが、これは今日そっくりどこかの国に当てはまる禁止条項である。それに続いて3つの確定条項をあげている。

- 1)各国家における政治体制は共和国であること（すべての国民が平等であること）
- 2)国際法は自由な国家の連合制度であること（今でいえば国連体制の強化）
- 3)第3世界市民法は普遍的な友好をもたらすべきこと（移動、訪問の自由の保証）

カントはここで人間の自由と平等を柱とし、民族、宗教、文化の異なる独立国家の存在を基盤としている。自由な国家の連合を国際法の基盤に置くことでカントは今日の国連制度を予測していたとも言える。アインシュタインも晩年には国家の存在を認め、彼の世界政府は連邦制となっている（第4回インタビュー）。カントはどうか、もう一步深く考えてみよう。

カントは「自由な国家の連合制度」と述べているが、その連合組織にどれだけの政治的権限を与えるかに大きな問題がある。彼はそこまで踏み込んでいないが、常備軍を廃止し、平和維持軍のような国際的軍事力の整備が必要となれば、そこに超国家的な要素が入ってくるのは必然である。カントが平和に関して自由な国家の上に立つ超国家的な機関の存在を認め、アインシュタインが連邦国家制を認めるとすれば、両者の間には本質的な相違はなくなる。こうして時代を隔てた2人の巨人の永遠平和を希求する態度には共通する面もあり、世界政治の将来の在り方について一つの指針となっている。

5. なぜ平和論か

人類はいまなお深刻な平和の危機にさらされている。現実的な、また、長期的な平和論の必要性はますます大きくなっている。

（1）核戦争の脅威 アインシュタイン晩年の最大課題は彼自身が核兵器の製造をアメリカ政府に進言したという事実で、それが戦後の彼に重荷となっている。現在は世界の世論によって核実験は抑制されているが、核兵器も拡散しており、核戦争の危機は依然として続いている。アインシュタインがいうように大量破壊兵器による戦争の回避は依然として人類全体の最大の課題なのである。そのためには、武力でなく粘り強い対話が望まれる。また、たとえ過渡的であっても国連総会の権威を高め、平和維持への効果的な行動を広げる努力が必要であろう。

（2）地球史的視点 21世紀の地球は長期的に見て大きな課題を抱えている。化石エネルギーの枯渇、途上国における人口爆発、先進国、途上国による環境汚染の深刻化、危機は21世紀末から22世紀に起こると考えられている。資源の奪い合いなどによって大きな紛争の発展する可能性もある。宗教的、民族的紛争も絶えないがその根底には経済的、政治的格差の要因がある。人類が国連主導の下にこれらの危機を乗り越えなければ、アインシュタインの世界連邦政府は現実的にならないのではないかとと思われる。

（3）地球外文明との交信 地球文明が数世紀で破滅してしまうとすれば、地球外文明との交流を可能にするにはあまりにも短いであろう。137億年の宇宙史の中で文明が交流するには相互の文明に少なくとも数百万年以上の平和維持機構が必要である。百万年単位の歴史で見るととき、アインシュタインの提言は現実的な重い意味を持つのではないであろうか。アインシュタイン自身は近い将来の世界政府の実現を期待した楽観的な見方をしてい

たようであるが、現実の政治状況はなお厳しいものがある。筆者は世紀を越えた長期的観点からアインシュタインとカントの平和論の意義を考えたい。2人の平和論は相補いながら壮大な未来の地球文明のあり方を予言したものではないかと思うのである。

アインシュタインの平和論から始まって、最後は自己流の平和論になってしまったが、ついでにアインシュタインの宗教観についてもひとこと付言してみたい。彼はユダヤ教の一神教に立って、その上で「宇宙を動かしているスピリット」を神と呼び、「自分の立場は宇宙的宗教だ。」と述べているが、この「神」には共感するところがある。ただし、一神教の神は創造者であると同時に人間に対する規範者であり、人間を救済し、また懲罰する。一神教は倫理を支配し、往々にして排他的でもある。その点、仏教は寛容で、神を立てない宗教といわれている。特に原始仏教はそうである。多神教のように多くの神々が現れてくるのは大乘仏教のような民間信仰が進んだ以後である。仏陀によれば救済は神ではなく自己自身の中にある。古い仏典には「自己のみが自己の依拠である」という一節があり[4]、それが仏教の根本思想であるという。自己には認識主体としての自己と、実践主体としての自己という二面性があるが、そのどちらの面に対しても宇宙における人間としての自己の普遍性への確信が前提となっている。その普遍性を「神」と呼ぶならば、仏教における「神」はアインシュタインのいう宇宙宗教の「神」とは同じものであろう。マックス・プランクも「宗教と自然科学とは決定的な点において完全に一致している」と述べているが、その根底には自然法則に対する畏敬の念がある。筆者も仏教徒ではないが、仏教の根本理念には共感するところがあり、それはまた、アインシュタインやプランクの宗教的心情と通じるものがある。ヘルマンズのインタービ

ューを読みながらそんなことを感じたので付言してみた。

注1) マンハッタン計画

第2次大戦中、アメリカが原子爆弾製造のために科学者、技術者を動員した国家計画である。

注2) 非米活動委員会

1947年に米下院に設置された、国家への破壊活動を調査すると言う委員会で、赤という理由で数千人が職を追われた。

参考文献

- [1]ウイリヤム・ヘルマンズ著、雑賀紀彦訳「アインシュタイン、神を語る」(原題 Einstein and the poet) 工作社、2000年初版。
- [2]「科学者と世界平和」現代の科学II, 世界の名著(中央公論社)1970年版
 1. 国連総会への公開状 アインシュタイン p.253 - 259
 2. アインシュタイン博士の考えの誤り セルゲイ・ヴァヴィロフ、A. N. フルムキン、A. F. ヨッフエ、およびN. N. セミィヨノフによる公開状 p.260-266
 - 3 ソビエトの科学者たちへの返事 アインシュタイン p.267-274
- [3]イマヌエル・カント著(宇都宮芳明訳)「永遠平和のために」(原題 Zum Ewigen Frieden, 1795)(岩波文庫)
- [4]石井米雄著「戒律」(仏教の思想、神山、梶山編、中公新書)1986